

伊江村立西小学校の教育実践

狩野 浩 二

(2000年10月13日 受理)

Thoughts on the Educational Practice at Nishi Elementary School, Okinawa Pref.

KARINO Kouji

目 次

1. 西小学校の教育実践
2. 校内研修による学び合い
3. 学力向上対策と学芸会
4. 子どもの姿を公開する

1. 西小学校の教育実践

伊江島は、沖縄本島北部にある本部港からフェリーで30分ほどのところにある島である。島内には、2つの小学校区と1つの中学校区がある。島には高等学校がないので、中学卒業後の生徒は、島を離れて本島内の高等学校へ進学する。

伊江村立西小学校（以下、“西小”と略記する）は、伊江島のフェリーターミナルから車で5分ほどのところにある。島は、全体に平板であり、なだらかな坂道が続く。西小学校は、港から若干高い位置にある。

西江重勝は、1997年4月に同校に赴任した。それから3年間にわたって同校での教育実践展開の中心として活躍した。

同校における教育実践の特長は、校長が“授業”を核とする学校づくりをめざしたということである。それと同時に、教科目と教科外活動との結合ということに力点を置いた教育実践をすすめた。

本稿は、校長のリーダーシップのもとに進められた教育実践の内実に光を当てる。西小における学校づくりの内容と方法を再構成し、教師の力量形成、表現活動と基礎学力形成の関わりについて追究する。

校長の西江は、教授学研究会の会、沖縄第三土曜の会¹⁾を活動の場の中心としてこれまでに多くの教育実践記録を発表してきている²⁾。琉球大学在学中に、斎藤喜博の著作に出会い、その後、県内の小学校で子どもの事実に学びながら教育の実践を積み重ねてきた。

西江校長は、赴任当初から教育の実践家や研究者を招いて、表現活動について教職員同士が学び合うということをすすめてきた。西幼稚園と西小学校の全校の子どもと教職員21名⁵⁾が表現活動を核にした教育実践を展開してきた。

西江は、沖縄県教育委員会で指導行政に一時携わった後に西小に赴任した。伊江村は、西江にとっては、生まれ故郷であった。

沖縄は、他の地域と比較して人々の故郷への思い入れが強い土地柄である。地域の郷友会は、都市へ人口が集中している今日にあっても機能している。数十年ふるさとを離れて暮らしていても、ふるさとで行なわれる行事の際には郷友会のメンバーが遠くから集まってくる。旧士族を中心として血縁を大事にするという土地であるけれども、地縁がさらに強力に人々の心のつながりをつくっているといってよい。何より地域の住民たちのなかに西江校長のかつての級友や知人が多く存在していた。この島は、新任校長として仕事を進める上で最適の地域であったといってよいだろう。

西江校長が赴任した当初の様子を西小の職員が記録している。

「1学期の始め、音楽主任による校歌指導が行われた。絵入りの歌詞が体育館正面に掲げられていた。詩の意味を説明した後で2～3回歌の練習が続いた。これまでは何事も起こらず終わっていたが、そうはいかなかった。校長自ら壇上に上がり、『残波岬⁶⁾はどこですか？備瀬岬⁶⁾は？』『そうなんです。山々が遠く連なっていますね。』『はい、そこで大きく息を吸って吐いて……。』などの基本的な発声練習が繰り返された。一音一音長く伸ばしながら。子どもたちはその要求にこたえていく。/後で音楽主任は、子どもたちの前で恥をさらされたという狭い了見から不満の顔が見えた(平成九年度) … (略) …」⁶⁾

西江は、赴任当初から意識的に教育活動の場で子どもとかかわっていた。それは、「校歌指導」というような場であり、また、実際の授業であった。

後述するように、西江は赴任当初から西小の校内研修に実践家や研究者を招いた。外部から指導者を招くことで校長をはじめとする西小の教職員全員がお互いに学び合うということを大事にしていた。校長自らが授業などの教育活動の場所で子どもと直接かかわることは、校長自身が“へそを出して”学ぶという姿勢を示した。こうした校長の姿は、赴任最初の年から学校づくりへのはつきりとした考えを職場の中に打ち出した⁷⁾。

「『私も裸になりますよ。いつでも授業をやります』そのことばは、前代未聞でした。24年間も図書館に勤めていて、管理者が授業をする？(理想論や武勇伝は聞かされても)しかもそうそうとその機会がやってきた。4年生の国語で詩の教材でした。(『はじめて小鳥が飛んだとき』作者 原田直友) /『この詩は、1連、2連、3連から成る詩ですが時間の流れもやはりそうですか？』/女の子がスーッと手を挙げ『私は2, 3, 1の順だと思います。』次いで男の子が『僕は3, 1, 2だと思

ます。』クラス全員にそれぞれの考えをはっきりさせた上で、主張通りに朗読をするように指示がなされた。女の子の後に読み終えた男の子がスーッと手を挙げ『僕は今〇〇さんの朗読を聞いて間違っていたことに気づきました。』『はい、そうなんです。はじめ担任の先生も皆さんと同じでしたよ。間違いに気づくそれが学習なんです。』どこまでも優しい言葉が続く。島の子どもたちが思慮深く感じられた⁸⁾

教材の論理に触発されながら、子どもは仮説的な論理を組み立てている。そこへ、教師がはっきりとした自己の教材解釈から紡ぎだした論理を持ち込む。子どもの学習を成立させる基本原則をふまえた授業である⁹⁾。地道ではあっても、教育の原理や原則に沿った仕事によって子どもの集中した学び合いを組織するというを西江は大事にしていたといつてよい。

また、繰り返しになるが「裸になる」ということが教職員の力量を育てるために大事な点であった¹⁰⁾。学び合いを組織していくためには、なにより学ぶ者の心や身体が開かれているということが大事なことである。そのことを校長自身が教育活動のなかで体現した。

西小における教育実践のひとつの特長は、学び合う学校を創り上げたところにある。校長が学級の受持教師を監督し、形式や観念で意見を述べるということをしていない。自らが行なった授業や手入れ（子どもの表現に要求を出し、子どもの表現を引き出したり、新たに創り上げたりしていく）を通して子どもの姿を材料に学び合った。

西江は、いくら校長が口で綺麗事を言ってみたとところで、教職員は納得しないと言う¹¹⁾。教育の原理や原則を示すことは大事である。しかし、それをスローガンとして言ってみたとところで仕事は改善されない。原理や原則に基づいた実践を通して、子どもの集中した学習の様子やイキイキとした表現の事実を見せることが必要であると西江は言う。校長が教職員を管理するという発想を捨て、子どもの可能性を引き出したり新たに創り上げたりする教育実践を教職員全員とともに追究していった。このことは、教授学研究会の会の研究活動に参加してきた教師たちが学校づくりの原理、原則として紡ぎだしてきたものであった¹²⁾。

平成9年5月27日、赴任から2ヶ月目に西江は詩の授業を行なった。

「詩の教材『かえるのびよん』『たんぼぼ』『ひらいたひらいた』の音読を体育館内で校長先生（西江校長のこと―筆者）に聞いていただくのと、舞台の方に子供達を集めることにした。ばらばらと集まり『先生どんな順序でならぶの。』『なににするの。』と声が聞こえた。『いつものようにグループ順よ。』と私は言って4列に並べた。その後、子供達は、元気いっぱい3つの詩を音読した。校長先生は、音読を聞いて子供達に『3つの詩をよく覚えたね。それじゃあみんな、体育館を一周してみようか。』と指示をした。なぜ音読を手入れするのに体育館を一周させたのか分からなかった。すると、音楽の先生がピアノの伴奏をし、私も子供達も曲を聞きながら歩き始めることにした。走ったり笑ったりふざけたりの子どもたちもいたが『ただ歩くのではなく胸を張り息を吸っては

く。』校長先生の一言で子供達の足音が軽やかになった。こんどはリズムにあわせ『右へ歩く。左へ。後ろへ。前へ。』の言葉がけで体が自然と動き始めた。笑いもあり楽しい雰囲気がつくられた。今度は『体育館の中央に並ぶですよ。』と校長先生の呼びかけで、集まろうとするが、きちんと整列が出来ない。やっとのことで並ぶことができた。それでも、校長先生は、温かい目で子供達の前に立っており、音楽の音にのせながら前後左右へとステップさせた。子供達の顔がにこにこ顔になり校長先生の合図とともにスムーズに動けるようになり体が少し柔らかくなってきた。音読をする準備には、お面ではなく、歩く、曲を聞きリズムにあわせる、呼吸、もっとも基礎的なことを子供達に教えるかにある(傍点-引用者)¹³⁾

授業者は、子どもの身体や心の状態を見抜いている。その子どもの状態に応じた具体的な要求を授業者が出していることが分かる。この学級の受け持ち教師がここに報告しているように、それは実際に起こったことであった。

『あ〜』という発声を、校長先生の指揮で3回から5回やっていくうちに声が伸び、響いてきた。その理由は、指揮者が子供達の声を体育館の後方に届けるようにと腕を高く挙げられ方向を示した指揮をとられたからである。次に、右と左の二つに分かれ広がることになった。友達同士くっついたりするグループもありながら整列し始めた。私は、『ここの位置に並ぶのよ。広がってよ。』と指示をした。それを見て校長先生は『友達と友達とがくっついていないかな。空いている空間をうまく利用すること。先生は、指示をしないで。子どもたちにまかせなさい。』しかし、きちんと整列ができないことを気にした私は、子供のそばに近づいて前や後ろへと動かしていた。その時、子供達の頭の上にあるお面がじゃまで床に落ちたりし落ち着きがみられない。それは、音楽朝会の時から頭の上に乗せていたかえるのお面であった。子供達は、今何をやろうとしているのか。子供達一人一人に『ひらいたひらいた』の詩の内容が入りイメージをもっているか。その作業が大切である。必要ないもの余分なものは取ること…(略)…校長先生は、子供達に『ひらいたひらいた/なんのはながひらいた/れんげのはながひらいた』を音読させながら『れんげのはなのおおきさはどのくらいかな。何本のれんげの花がさいているのかな。』と詩の内容を追求させた。子供達は『1本・3本・5本・10本…』と答えた。そこで、『担任の先生は何本のれんげの花が咲いていると思いますか。』子供達の問いと同じことを聞かれびっくりした。考えて『1本』と答えると校長先生は、『たくさん咲いている。これから咲きはじめようとしているれんげ、つぼみかけているれんげ、開いているれんげがたくさん咲いているんじゃないかな。』子供達は、話をよく聞きうなずいた…(略)…口を大きく開かなかつづみさんが自然に『ひらいたひらいた』と歌っているではありませんか。その隣できさきさんは体を前に出して口を大きく開けて思いつき歌っていたのです。また、元気者のこうじ君は『口を大きく開けて大きな声ですね。』とほめられてうれしそうでした。いたずら好きでなかなか集中しないけんとう君たつなり君もとき君しょうへい君たちも思いつき口をあけて

『ひらいたひらいた／なんのはながひらいたれんげのはながひらいた／ひらいたとおもったらいつのまにかつぼんだ。』を歌い終わった。これほどの力を短い時間に発揮できる子どもたちの顔を忘れません。音読をする姿勢やふだんの歩き方をおそわったばかりの子どもたちは、体育館の玄関まで楽しくステップしながら教室まで歩いた。教室での会話というと『校長先生とお勉強できて楽しかった。』『先生、れんげの花は教科書に1本開いているよ。』『あせもかいたよ。』『知らないことを教えてくれたよ。』『校長先生にお手紙を書きたいな。』…（略）…（傍点－引用者）」¹⁴⁾

子どもは、この後、次のように変わっていった。

「その日の三時間目では、水遊びの場面で子どもたちは『ひらいたひらいた』をうたいながら水の中で輪になりうずを作ってたのしんでいた。想像以上に子どもたちの心や頭の中に刻み込まれたのだろう。子供達同士、または、クラス全体に目に見えない糸がぴーんと張られ心が引き締まった一日であった」¹⁵⁾

西江は、子どもの持ち味を生かすとか、個性を生かすとかそういう観念ではない、実際の事実として子どもの姿を変えていった。この事実を目の当たりにした受け持ち教師は、明らかに謙虚になっている。自分が受け持つ学級の子どもが見る見る間に変わっていく様子にとまどっている。しかし、だからといって卑屈になったり、自分の仕事を投げ出してしまったりしていない。西小の教職員たちのなかに“裸になって”学び合う空気が醸成されつつあったとみてよい。

2. 校内研修による学び合い

実際の授業や資料の読み込みを通して次第に職場ぐるみの学び合いが組織されていった。校長による校内研修や私的な時間を使った学習会を通して、西小の教師たちは自己変革をしていった。

「私にとって『学ぶ』ということは『壊される』ということから始まった。これまでの既成概念を取っ払わなければ有益な前進は望めないと判断した私はかなり迷った。そして、これまでの既成概念を捨て、新しいものを受け入れることがこんなに苦痛をとまなうものだとは思ってもみなかった。研修中、私はずっと自問自答の繰り返しであった。今、振り返ってみると研修は私にとって『子どもの個性とは、子どもの可能性とはなんだろう』という答えさがしの旅のようなものであった」¹⁶⁾

西江は、西小赴任当初から外部講師を招いた「特別研修会」を企画し、実施した。西江校長が西小在任中に招聘した外部講師の実技指導や手入れは、100時間をゆうに超えている¹⁷⁾。

外部講師は、単なる講演とか、指導助言とか、そういうようなのんびりとした形式的なことをし

なかった。手弁当で来校し、あくまで“授業”などの実際の仕事を通して学び合うことを大事にした。それが、校長の意図であった。子どもが集中して学んだり、生き生きと表現したりする事実には教職員が直面し、彼らが自己を変革していかない限り、校内研修にはならないと西江は言う¹⁸⁾。

第1回目の外部講師による“手入れ”は、校長赴任の年にさっそく行なわれた。平成9年6月のことであった。

「…(略)…いよいよ第1回目の、子どもたちの可能性を引き出し、豊かに表現する基礎づくりのための梶山先生による手入れ作業が始まった。当初先生たちの間では『子どもたちはできませんよ』の声や不満の声が多かった。しかし、校長は怯むどころか『できないのはあなた(教師)であって』と直接言わないまでも『子どもたちは多くの可能性を秘めているんです。それを引き出し、いい仕事をしようじゃないですか』…(略)…梶山先生によって引き出される歌声が、指揮が担任へ移ったとき、これまで高まってきた歌声がガタンと落ち込む事実が素人の私にでも見えた。指導の力量は、同じではない。だから、よいものを見て知って自分の肥やしにさせたいのだ」¹⁹⁾

記録者は、図書館司書であり、専門職員である。

外部講師による手入れは朝から晩まで続いた。その間、手の空いた職員が手入れの場所に立ち会い、映像記録をとるなど、受け持ち教師や校長とともに学び合った。後述するように図書館司書や養護教諭、業務員などそれぞれの専門職員は、学校の教育活動において大事な役割を担っている。特に、表面には現われない場合が多いが、しかし、子どもとの関わりが教員と同様に日常の中に無数に存在している。

職場において、すべての教職員がともに学び合うということが創造的な学校を形成するために必要なことであった。後に西小で作られたオフセット版の教育実践記録は、西小と西幼稚園すべての教職員が書いた文章を載せ、全教職員の手によって作られた。ここに職場づくりの原則が貫かれている。

同じ敷地内にある西幼稚園の子どもや教師たちが、西小とともに外部講師の手入れを受けていた。

「特別研修を受けて、今まで自分が正しいと思っていた事が全部打ち砕かれてしまった。/指揮も・表現も・歌も・私は今まで、歌の指揮は全員の歌をそろえるもので、正確に拍子打ちをすることだと教わって来たし、信じていた。/表現にしても同じ、動作の模倣が幼児のやる表現だと思っていた。/歌も楽譜通り歌うことが正しいと思っていた。だから今まで『口を大きく開けてきれいな声で歌おうね』と、歌詞を覚えさせて歌わせていた。/しかし、梶山正人先生の研修を受けてどれもみんな自分の思い過ごしであることに気づかされた。・・・私は、今まで何をしていたのだろうか?頭を後ろからこん棒でたたかれたような気がした」²⁰⁾

特別研修会では、実際の指導を通して学び合うということが行なわれた。まずは、具体的な教材をもとに受持教師が指導する。その後、同じ子どもを今度は、外部講師が指導する。そこで子どもの姿がどのように変わっていくかをお互いに“見る”ことを通して、指導の原則を学んでいった。

『みにくいあひるのこ』の物語は、ほとんどの子が知っていたので歌の指導をしてみることにした。歌の部分が7曲もあるので取りあえず歌を早く覚えようとそのあせりから何回も何回も歌をうたうことだけをやったので、子供たちはつまらなそうな顔をしたり、隣の子とおしゃべりをしたりチョッカイを出したりの連続であった。歌だけではダメだ、次は身体表現へもっていこうと考えた。広い体育館のフロアでステップの練習を始めた。子供たちは広い空間でかけずりまわり、あげくの果ては、舞台上、ピアノの下へと散って収拾がつかなかった。歌うことにポイントをおくと表現ができず、表現に重視したら、かんじんの歌声が聞こえない。こんな状態で、どうしたら、この子供達が物語のおもしろさを歌で表現することができるのだろうか、このようでは身体表現までもっていけないのではないかと、次から次へと難題にぶつかっていった」²¹⁾

子どもを抑圧するものから開（解）放することは、学ぶ状態を創り出すために重要なことである。しかし、それだけでは子どもが精神的（内的）に集中できるというわけではない。

その後、外部講師の手入れによって子どもがかわっていく。

「私はみにくいあひるのここの場面場面で子供達の変容にただ驚くばかりであった。と同時に、この子達のいいものを見抜けなかった自分自身にはがゆさだけが残った。教師が変われば、こんなに子供が変わるのか、この子達の担任は私なのに、どうしてどうして。大きな声で叫びたかった」²²⁾

この教師は、かつての自らの指導の事実をふり返って、次のように言う。

「去年よりは少しわかっていたつもりではあったが、又みごとに打ち砕かれてしまった。情けなかった。しかし落ち込んでばかりいてはダメだ。自分をさらけだすのも又私の表現のひとつだったのではないかと開き直った。子供たちは、こんなに声が出て心を1つにして楽しんで歌っている。…(略)…歌唱指導の時『ハイ口を大きく開けて、きれいな声で歌おうね』から始まり、指揮はトライアングルの形をなぞるような方法でずっとやってきた。その事について誰一人おかしいと指摘する事もなく、私自身、これが正しい事だと思い子供達におしえてきた。しかし、この研修（梶山正人の指導）によって、みんなみんな打ち砕かれてしまった。よい教材を選ぶこと、教材解釈、呼吸法の大切さ、一人一人を大事にする指導法、それらを学ぶことによって、教材に深まりができてよりよいイメージづくりができ豊かに展開できるということもした…(略)…(傍点-引用者)」²³⁾

西小の教師たちは、特別研修会での出来事を記録している。彼らは、子どもの表現する姿の変わりようを目の当たりにして、教師としての腕前を上げていく必要性を実感していった。

「梶山先生による特別研修会は昨年度も2度あった。第1回目に、それまでは体育館に行くとき上り木に登ってしまい、体育の授業をすぐに始めることができなかった子どもが、その日を境にすぐにみんなと一緒に授業を始めることができるようになったこと、また、子どもたちの良さをたくさん褒めながら、集中して楽しく歌ったり学習活動に取り組むことができるようにして下さったことが思い出された」²⁴⁾

上級生といっしょに歌うことの楽しさを3年の子どもが記録している。子どもは、教師同様、自己の変化に気づいていた。

「六年生といっしょに歌うとドキドキしたけど、『よし、やるぞ。』と思ってゆうきがでたよ。歌っているとどんどん楽しくなって、みんなの音がまとまっていったよ。頭の中に音がたくさん入り込んでいったよ…(略)…六年生は高い音を出して、『六年生ってすごいな！わたしもあんな六年生になりたいな。』と思いました…(略)…ほくは、六年生の音といっしょにならないかなと思いました…(略)…六年生の歌を聞いてみると、ほくたちと、けたちがいの声で歌っていました。でも、ほくたちも負けなようにがんばります…(略)…」²⁵⁾

“手入れ”の様子を間近で見ていた職員は、子どもの変化について次のように言う。先述の通り、学校の全教職員が特別研修会などの学び合いに参加していた。そのことが次のような子どもの姿を顕在化させた。

「…(略)…『ピース』、『イエーイ』…。/体育館の隅で、ビデオカメラをあつかっている私に、子どもたちは笑顔を見せてくる。これから何が始まろうとしているのか、不安と期待の入り交じった笑顔だ。/実際指導を通しての研修会が始まったばかりの頃、『おなかが痛い』『頭が痛い』『気分が悪い』とほぼ決まった顔ぶれが保健室に訪れていた。とまどいが子どもたちの小さな胸いっぱい広がっていた。先生方と研修を共に受けている私でさえ、これから何をしようとしているのか、何をどうしたらいいのかが分からず、とまどっていたのだから、今、目前にいる子どもたちのとまどいがよく分かった。しかし、研修会が回を重ねるにつれて、保健室に顔を出す子どもたちも少しずつ減っていき、私自身のとまどいだけが保健室の中で空回りしていたのだった。/あのとまどいの中の子もたちはどこへ行ったのだろう…。/そういう自問自答がしばらく続き、とまどいの中、私は、ビデオカメラをまわしてた。/あれ？あの子…。え？あの子も…。頻りに保健室に出入りしていたあの子もたちが、今、私が向けているビデオカメラのレンズの中で、

真剣な表情で授業（梶山先生の実際指導）に参加している。私の向けているビデオカメラなんか気にもしないで……。/レンズの中にいる子どもたちは、迷い、とまどいながらも、しっかり前を向いて歩むことを無意識の中で知っている。最初の一步がただ踏み出せなかっただけなんだろう（傍点-引用者）」²⁶⁾

すべての教育活動をすべての教職員と創造していくことの意味が、よく分かる記録である。教室の中で発見された子どもの事実や保健室の内部で発見された子どもの事実がリアルタイムで交流し合っている。専門分化した「専門性？」の殻に閉じこもって教職員がおのおの蛸壺化してしまっただけでは、学校の力は発揮できない。同じ学校に勤めていても、それだけでは職場の力が生かされない。お互いにへそを出し合い、裸になって子どもの姿に学ぶということが必要である。

3. 学力向上対策と学芸会

2000（平成12）年2月5日、西小で学芸会が行なわれた²⁷⁾。筆者は、学芸会実施の2日前から同校を訪ねた。この年、西江校長は西小着任から3年目であった。校長自身同校での学校づくりの総まとめをしようと意識していたようである。今回の学芸会は、その3年間の教育実践を総括する会であった。

前日から外部講師である梶山正人による最終の手入れが同校の体育館で行なわれた。梶山は、教授学研究会の会を中心として音楽教育の実践と研究を行なってきた。東京の小学校教師を経、欧州への留学後、宮城教育大学附属小学校で音楽専科教師となり、その後、研究者となった。梶山は、子どもの歌を多く作曲している。西小で取り組まれた合唱やオペレッタ、総合表現のいくつかが梶山の手になるものである。

筆者は、学芸会の前日、一日がかりですべての演目を見た。時折講師の梶山が子どもの動きや声に注文を出していく。校長のそばで筆者はその指導の実際を見聞する貴重な機会を得た。

手入れは、全体の流れを作るような子どもの動きや表現の内容を確認する程度のものである。先述の通り、梶山は、100時間を超える手入れをすでに行なってきた。子どもの発達の可能性を信頼しながらも、しかし、質の高い要求を次々に梶山は出す。具体的な要求を出された子どもは、その言葉に反応して、想像力を働かせていった。自己の想像をあれこれと頭に浮かべながら動作や声に工夫をこらし、次々と自分の持っている力を繰り出していった。

取り組まれてきた表現活動は、①合唱 ②オペレッタ ③総合表現である。すべての表現活動が柔らかな身体を使い方、身体全体をつかった呼吸法、抑えの効いた声の使い方を生かしたものである。特に身体全体に意識を集中させていることが分かる。

オペレッタや総合表現は、それぞれ30分はゆうに越える長い時間にわたって展開された。合唱やオペレッタ、総合表現などの表現活動に取り組む子どもの前で、受持の教師たちは子どもと同様に表現の世界に入り込んでいく。ある教師は、子どもの表現に釣り込まれて、いつの間にか子どもと

一緒に身体を動かしていた。観客席用の座席に腰掛けてみると、教師の後ろ姿しか見ることはできないが、しかし、実に美しい先生方である。腕や手の動き、指先の小さな動きが全身の動きとつながっている。身体を低くかがめながら子どもの呼吸のタイミングを計る教師は、自らも両腕を十分に開いて身体全体で息を吸い込むようななめらかな動作をしていた。

手入れをする梶山は、心から子どもたちの力を信頼している。やや動きにぎこちなさがあったり、乱暴なところが子どもの表現の中にあってもそのことを取り立てることはしない。表現している子どもが気づいていない別の子どもの美しい動きをつかまえて、それを全体の子どもの前に示す。子どもは、自分がよいと思う子どもの動きを見ながら、自分の動きを工夫し、変えていった。

手入れの内容は、具体的な言葉や動作として子ども全体に対して示されることが多い。言葉の解釈をめぐる教師の内側にある“想像”がリアルな比喩によって提出される。具体的な“問い”が授業者から出る。それに応じて表現内容を解釈することが子どもに求められる。具体的な問いに触発されて子どもの内側にある想像力が引き出され、一瞬にして彼らの声や動作が変容した。

それに反応するようにしながら西小の教師たちは、学芸会当日のように本番さながらの表現を子どもと一緒に作っていった。そうしたなんともいえない緊張感と心地よさに包まれながら子どもの実感を伴った豊かな表現活動が目の前で次々と繰り広げられていった。

翌日は、学芸会当日である。会場の中ほどには保護者用の観客席がしつらえてある。体育館のフロアは、ほぼ半分に分けられている。ステージ側からフロアの中頃までが、子どもの表現活動の舞台である。広いフロアと舞台の全面が表現活動の場所となる。いっさいの無駄が排除され、会場には、グランドピアノが一台あるだけである。森の木々も、空の色も、道ばたの草花も、全ては子どもたちの身体が表現する。いっさいの飾りを廃して、子どもの姿そのものの美しさを引き出すことに成功していた。

フロアの中頃から、後方の出入り口に向かって観客用の席がある。地域の住民が自由に鑑賞できるように、前半分がござを敷き詰めた場所である。後ろ半分がパイプ椅子を雛壇状に設置し、遠くからでも全体が見渡せるようになっている。

観客席からは子どもの入場する姿から退場していくまでのフロアと舞台前面を使用して行なわれる表現活動のすべてが見える。入場の場面に始まり、表現活動が終末に向かい、最後に退場していく子どもの姿が体育館から見えなくなるまでがいっさいの流れとなり、演目の全体が見渡せるようになっている。

・合唱

合唱は、各学年のものと下学年、上学年によるもの、上級生と下級生によるもの、全校児童によるものなど変化に富んだ構成であった。

幼稚園から小学校6年生までのすべての子どもによる合唱は、「たんぽぽ」²⁸⁾と日本古謡「うさぎ」である。上級生の子どもが低声部を支え、下級生の子どもは上級生の声に乗って気持よさそうに旋

律を歌った。

高学年の子たちがややゆったりと“たんぼぼ”と呼びかけると、低学年の子たちが軽快に“たんぼぼ”と呼応する。そして、“そろって咲くよ、石のそばに咲くよ”と十分に息を使いながらたっぷりと歌いきる。後半部分は、最後に気持をぐっとためながら、短い休符の間に気持を集中させて、“踏まれても、踏まれても”とつながっていく。

ただ単に子どもが表現している楽曲がそう作られているからというわけではない。子どもの声のなかには具体的な情景があり、解釈があった。

たんぼぼの咲いている光景が広がる。たんぼぼの咲いているところがどんな状態であり、そこにはどんな道が広がっているのか、たんぼぼの咲く草原からどんな空が見えており、天気はどうか。こうした詩の解釈が教師や子どもの頭の中にある。詩に表現された具体的な“世界”がはっきりと子どもの声や身体全体に現われていた。

特に低学年の子どもの身体が実に柔らかかった。足の指先から頭のとっぺんまでが柔軟にのびのびと動いていた。子どもの声や身体の中には、ゆったりとしたなかに軽やかなリズムがたたえられている。

子どもの顔は、これまた柔軟に動いていた。眉や頬は、しなやかに上下左右に動いていた。こわばりや引きつりとは違って、口の縦の動きや横への動きと対応した動きである。踵^{かかと}から膝、腰、首、頭と無理のない立ち方である。そうした一連の身体つながりの上に意識が集中している。しかし、あくまでリラックスした表情であった。

時間の流れとともに表情は複雑に変容する。後半にさしかかると、明らかに充実した満足感が子どもの顔に出てきた。なんとも気持よさそうである。

短い休符の後に“踏まれても、踏まれても”と押さえのある声でありながら、ことばをしっかりと立てていく。

その後クライマックスを迎えた。“明るく咲くよ”と、高らかに歌い上げていく。短い息継ぎの間に子どもの気持が次の節へとつながっていた。しっかりと息を吸い込んでいるのであるけれども、吸いすぎて空振りするような子どもはいない。そこで踏まれつつもじっと耐えているたんぼぼの姿がぐっと観衆に迫ってきた。旋律にのり気分良く歌い上げる子どもの声は、たっぷりと助走の部分走り抜けた。ちょうど跳び箱にむかって助走していく前に子どもが自分の跳躍する姿を頭に思い描いている時のようである。楽曲の終末“道の端のたんぼぼ”へとつながっていった。

まったく不思議であるけれども、子どもは実に柔軟でのびのびとしていた。身体を締め付けるような“こわばり”がなかった。体育館のフロアには、たんぼぼの黄色の花が力強く花開いており、その間に続く道を子どもが軽やかに走っていくようである。そういう光景が合唱をする子どもの姿のなかに浮かんできたのであった。

身体のどこにも無理がなく自然と身体の内側からリズムが湧いてくる。声と身体がしっかりとつながっていて、それぞれの表情が子どもの身体の内側から出てきた。

人間の表現力は実に豊かなものである。そうした豊かな表現活動を通じて心や身体が開かれていくということをまさしく目の前にいる子どもたちの姿にみることが出来た。

身体全体を使って充実した声で歌う子どもの姿は、本当に美しいものである。高学年の子どもの声に支えられて、低学年の子どもが気分よさそうに声を引き出していく。子ども全体の声が質的にも量的にもどンドンと厚みを増していくのが感じられる。身体とそこから繰り出されていく息と、声とのつながりがはっきりとわかった。

・総合表現

上級生は総合表現に取り組んだ。総合表現は、合唱や朗読、斉唱、身体表現など身体全体を使って行なう“総合”的な表現活動である。

6年生は、総合表現「不死鳥の如く」²⁹⁾に取り組んだ。この作品は、沖縄の自然や歴史、文化を素材にしたものである。詩は、現大分大学学長の野村新が1990年代始めに沖縄の宮城小学校のために創作したものである。宮城小では、当時創立10周年を迎え、かつてない取り組みを同校の運動会のプログラムとして取り上げることとし、そこで、当時教頭であった西江が校内の学習会を組織し、野村、梶山による作品づくりと表現活動の手入れをすすめたのである³⁰⁾。

宮城小時代には、第一部のみの表現であった。今回は、その全編に梶山が曲をつけ、40分にわたる表現活動として構成していった。

西小6年生の子どもが、沖縄に暮らす人々の過去に受けてきた心や身体の痛みを全身で表わしている。地面にひれ伏しながらもある子どもは右腕を身体の内側から絞り出すように繰り出した。別の子どもは、苦悩の表情を浮かべながら、頭を包むような手の動かしかたで心の内面を表わそうとしている。大海原からわたってくる敵を、大地にしっかりと立ち立てた両足と腰で、迎え撃つ民衆の怒りを広くひらいた両腕と前後に揺さぶられる上体によって表現している。

どの子どもの表現も、教師が強制した動きではないことが分かる。どの動きにもそれぞれ子どもの持ち味が生かされている。やや猫背の子どもは、両腕を抱えるように苦しみを表現している。背が小さいけれども背筋力のある子どもは、胸を張り、顔を天井の方に逸らすようにして前屈みの状態を腰で支えていた。子どもは、さまざまに持ち味を生かしながら工夫し、その気になって表現の世界に入り込んでいる。そうでなければこうした表現活動を40分にわたって演じきることはできないといってよい。

梶山は“怒り”というような抽象的な感情内容を表現するのは難しいという³¹⁾。確かに前日の手入れの際には、この点に指導の力点が置かれていた。実際に表現活動に取り組んだ子どもは「…やって難しいと思ったところは、干ばつや台風などのところを体で表現するところです。だから、水が飲みたいけどない所などをうまく表現して、見る人が分かってくれるといいです」³²⁾と言う。

学会会当日の子どもは、前屈みになった胸のあたりから左右に向かって絞り出すように両腕を繰り出しながら、実感のこもった表現をしていた。子どもは、“怒り”や“苦しき”を物語の展開にしたがって具体的に心の中で想像していた。それが細かな指先の動きや遙か遠くを見据える視線、

全身の動きとはっきりつながっていった。

この年6年生は、初めて身体を十分に使った表現活動を経験した。筆者の見た限りにおいて、たしかに身体や声の使い方に不自然さが若干あった。数年間にわたって全身を使った表現活動を経験してきている幼稚園や低学年の子どものような、しなやかな身体全体の動きとは違っていった。6年生の全体に合唱の時からごちなさがあった。

しかし、前日の手入れの際に梶山から場面と場面の連続性について指導を受けた子どもは、当日、まったく別人のようになった。次々と展開する場面の中で左右や前後の子どもがお互いに呼応し合い、実にスムーズに連続した表現を行なった。手前で独唱している子どものあとで子ども全体が合唱に移る。その際、まったく切れ目のない展開が創られていった。子ども同士が、お互いに糸で引き合うように反応し合った。それにつれて子どもは、表現の世界に浸りきり、思う存分自分の内面にある感情を自分の身体全体から表出していった。

・オペレッタ

2年生は、オペレッタ「火い火いたもれ」³³⁾に取り組んだ。子どもの身体や声から実感あふれる表現が次々と繰り出さる。ムササビの力を借りながら失ってしまった火を手に入れるために展開する“チセ”の旅が2年生全員で演じられた。

山鳥の火をめざし、地面にむかって舞い降りる子どもたちは、それぞれに独自の表現をしている。キツネの火の場面では、暗く寂しい森の情景がつくられていくが、こうした場面の転換に流れがあり、美しいリズムがある。

ヤマンバの場面は圧巻であった。ステージの上でヤマンバを演じる複数の子どもの動きがまったくすばらしかった。大きくひらいた両足で地面を踏みしめて、がっちりとはひらいた両方の腕が空にむかってつきだしている。手はしっかりと空気をつかむように開き、指先までに神経が張りつめ、おどろおどろしいヤマンバの姿を象徴している。その表現に触発され、ムササビやチセを演じる子どもらの動きが一段とよくなっていった。

クライマックスを乗り越えた子どもたちは狩人のあたたかい炎を表現し終末にむかう。チセやムササビのほっとした表情がムササビによる軟らかい飛行の姿として表現された。木や森、ムササビ、炎とあらゆる表現の内容が複数の子どもの複雑に絡みあう動きによって展開する。子どもは特別な舞台装置や衣装に頼ることなく、すべてを自分自身の身体そのもので表現している。そのことでかえって子どもの力が引き出されていく。そうした展開の末に子どもは次第に幅広く間隔をとりながら終末の合唱に一段と気持を入れ込んでいった。

はっきり明るい火がどの子の顔にも浮かんだ。どの子どもの顔もすっきりとしており、満足感に満ちあふれた表情であった。

フィナーレを迎えテンポのよいピアノ伴奏にのり、子どもが退場していく。作品の最終場面が子どもの表現として構成され、単なる退場とは違うものとなっている。入場と同様、フロアーから退場していくところを含めて、作品の世界が構築されていた。子どもは思い思いのムササビになりき

り、左右に巡回しながら、次々と退場していった。

・集中と表現

全校合唱と学年別の表現活動に続いて、上級生、下級生によるそれぞれの合唱があった。幼稚園から3年生までの子どもは、「一つのお山を越えたなら」³⁴⁾、4-6年の子どもは、「ひとつのこと」³⁵⁾である。プログラムの最初に全員で合唱したときはまた違った雰囲気があった。どの子どもも充実した表情で合唱の隊形を作っていた。

入場する子どもは、実に澄み切った表情であった。裸足になった足の先にまで気持が入っているという感じでさっさと入ってくる。子どもと子どもとの間隔は子どもが意識して作りだした空間である。日常的に生活の中にリズムがあり、行動への意識化が働いていることの証左である。

子どもは、先ほどまでオペレッタや総合表現を演じる中で力を出し切り、内容のある表現活動をやり終えた成就感に包まれていた。明らかに朝一番に歌った全校合唱とは雰囲気がすっかり変わっていた。すべての子どもの身体が開かれていて、外的にはすっかりリラックスしているが、しかし、精神的にはすばらしい集中力をたたえた表情であった。

歌っている子どものすべてに充実した笑顔が満ちていた。表現活動を終えた後の子どもたちの合唱は、これまでの表現づくりの過程をすべて出し切るような勢いと内的な緊張感をたたえたものであった。

会場の舞台を背景にして、列の奥から順繰りに子どもが並んでいく。合唱の隊形に並ぶために歩いていく子どもは、はっきりと目的意識を持っていた。実に整然と並んでいくのであり、前に並んでいる子どもの方に向かって詰めすぎたり、逆に手前で止まってしまったり横にずれたりすることがない。自然に前後の子どもとの間隔をとっていた。こうしたことも、表現活動の中で心や身体がひらかれていったから起こることだといってよい。

そしていよいよ合唱である。子どもたちの描く円弧が吹く風に立ち向かうように左右にピンと張っている。その円弧を引き絞るように指揮者がたっている。ちょうど大きな風を揚げるのときに指揮者の身体の動きに子どもが反応している。前奏が始まると指揮者の手に子どもの視線が一斉に集まった。子どもの集中力が一気に高まっていった。

演奏がはじまると子どもが息を吸い込む様子に引き込まれていく。聴いているうちに聴衆である筆者までが子どもと一緒に息継ぎをしてしまう。それほど、充実した歌い方であった。

「梶山先生の手は、魔法のようだ」と西小の子どもがいったということである³⁶⁾。まさにそれはその通りであった。指揮者は、子どもの呼吸を巧みに引き出していった。指揮者の手に引きつけられるようにして子どもの声がどんと観客席の方に向かって飛んできた。身体が座席の背の方に押しつけられるような感じさえた。

子どもは、歌が次の展開へと進むにつれ、歌曲の持つ力によって新たな力を引き出していくようであった。

4. 子どもの姿を公開する

西幼稚園、西小の学芸会は、子どもの学習の成果をそのまま公開するものであった。オペレッタや総合表現、合唱などは、すべて身体を使った表現活動である。それは、国語や音楽、体育、美術など、表現に関わる教科目の授業と直接つながるものであった。

時期は前後するが、西江校長2年目の年に学芸会を参観した親たちが、子どもの姿を次のように言う。

「…(略)…各学年の演技が始まった時一番ビックリしたのが、どの子の目もキラキラ輝き一人一人が自分の演技を大事にしていたことです…(略)…入場から退場までこまかく指導されているように思いました…(略)…今度の学芸会は今までとは違い、子供たちが最初から全員そろって出て身体全体を使って元気よくやっていたのでとてもよかったです。終わるまで子供達みんなの姿も見ることができたり帰るのも一緒に、こういう学芸会もいいなと思った…(略)…幼稚園児、各学年の児童それぞれ全員が、標語通りに(研究主題の意か一筆者)自分達の歌や踊り、劇を一生懸命に力いっぱい演技し、私達に日頃の練習の成果を披露してくれました。一人一人が楽しそうに思いっきり自分の役をこなす姿は本当に素晴らしく思わず涙が出るほど感動してしまいました。/『みにくいあひるのこ』を演じた娘ものびのびと楽しそうに踊っており、親としてまず一安心すると同時に、この学芸会という大きな行事を通してまた一段階大きく成長したように感じました」³⁷⁾

2年目の年には、さらに地区音楽会、全沖縄音楽会に低学年の子どもが参加した。低学年の子どもは早い時期から表現活動に取り組んできている。

「…(略)…会場の外で練習している時も、会場の大ホールに向かって移動している時も、子どもたちは臆することなく『歌うこと』に気持ちを集中させていることを感じた。本番では、それまでの練習以上に気持ち良く、大きな会場いっぱい声を響かせてくれた。前々日の何人かの音の外れも不思議となくなっていた。聴いていた応援団の方々は、『歌にも感動したが、入退場がどこよりも良かった。』『聴いていて、涙が出るくらいによかった。』と口々に言って下さった」³⁸⁾

子どもが意識を集中させ、生き生きとした表現活動を創り上げたことが分かる。よい意味での自信をつけた子どもは、校外での発表の場において、のびのびと歌った。次の記録は、全沖縄音楽会に国頭地区(沖縄本島北部と離島を含めた地域)の代表として参加した時のものである。

「…(略)…『キョロキョロしながらちょこまかと移動する西小チーム』というだけでも注目を集める。私たちは中庭の小さなスペースを見つけ、子どもたちを並べさせた。ところが、子どもたちが伸び伸びと気持ち良く歌い出すやいなや、他の合唱・合奏の音が遠慮し始めた。指揮をしていた

私は多少ひるんだが、子どもたちは気にもせず歌っていた。歌い終わると一瞬の静けさがあり、その後、周りにいたチームから声出しにもかかわらず大きな拍手が沸き上がった」³⁹⁾

記録は西小の教師の手になるものであり、若干の誇張があるかもしれないが、しかし、それにしても子どもの発達の可能性というものの大きさに驚かされる。

西小の表現活動と基礎学力の関係について同校の専門職員が次のように記録している。記録の時期は1999年の春であるけれども、表現活動と認識活動の関係を洞察した内容になっている。

「この一年、表現活動を取り入れた学習をサイドから見てきたが、子ども一人ひとりの感性を大事にし、また学習の全てにつながる基礎・基本をしっかりおさえた学習だなと思った。私もこれから教師になりたいと思っているが、この西小で学んだことをすぐには生かせないかもしれないが、少しずつ自分のものとして生かしていけたらいいなと思う」⁴⁰⁾

また別の職員は、子どもたちの変わり様を次のように記録している。前の記録同様、西江校長赴任から2年目のものである。

「…(略)…最近の子供たちの成長に、気づかされます。/窓から見える幼稚園児、大きくなったなあ。遊び方がうまくなってきた。/1年生は、ちゃんとあいさつできるようになってきた。礼儀、ことばづかいもゆき(と一筆者)どくようになってきた。/りょう君は、ことばとことばのつながり方がうまくなってきていた。/これまで何年かこの仕事をしてしていますが、子供の成長に気づかないことが多かったです。/ふりかえったり、感動したりしたことははじめてです。/教室から子供たちの歌声が聴こえるとき、あの『大きな石』が聞こえてくる時、子供一人一人のほほえんだ顔々があらわれてくるような気持ちがして、わたしまでが気持ちよくなります。/手入れのゆきとどいた花壇に咲く花々をみて、心がなごむのと同じように気持ちがよくなります。/あのはつらつした歌を聴いていると、昔にもどりたくなります」⁴¹⁾

のびのびした学び合いによって、子どもは授業以外の場面においても、生き方を工夫していることが分かる。教授学研究会は、学習指導と生活指導とを結合させるという教育実践上の課題を追究してきている。西小の教育実践は、そのことを学校づくりの場で追試した。一般的に言えば、生活指導は、学習指導とは区別されて捉えられることが多いが、しかし、西小の実践をみる限りにおいてそのふたつは重なっている。むしろ、学習することを一番大事なことと捉えることで、子どもの発達の可能性を引き出したり、あらたに創り上げてしまったりしているといつてよい。

筆者が西小を訪ねている間、何度か西小の子どもに出会うことがあった。学校の校長室で懇談する間や職員室で歓談する最中に、子どもの騒々しい足音とか、抑えの利かない叫び声とか、そうい

うものにまったく出会うことがなかった。体育館から校舎に続く道すがら、休憩時間に外で遊ぶ子どもに何度も出会った。その子どもたちは、身体全体をつかって遊んだり歌ったりしているが、決して騒々しくなかった。柔らかな身体をしなやかに動かしながら、十分に空気を満たしたゴム鞠のように軽やかに走っていった。

宿舍となったペンションの2階から外を眺めると、バスに乗って通り過ぎる子どもが盛んに手を振っていた。同行の梶山正人氏が階段の上にさしかかった時、子どもたちは口々に「梶山先生」と声をかけた。その声は、実に澄んだ響きのある声であり、耳障りな叫声ではなかった。

2000年2月に行なわれた学芸会は、「学力向上実践発表会」をかねたものであった。沖縄県では、1970年代から学力向上運動が県の施策として取り組まれてきており、その一環として行なわれたということである。

西小で考えられている学力は、授業や表現活動の展開のなかで追究され培われるものである。その成果が授業以外の場において発揮されたと見てよいだろう。

註

- 1) 狩野「沖縄の子どもと学力—沖縄第三土曜の会における教育実践を中心として—」、『沖縄教育と近代学校に関する研究』平成9-11年度科学研究費補助金報告書, 42-58頁
- 2) たとえば、『「あとかくしの雪」の介入授業から学んだこと』、『事実と創造』No. 37, 1984年6月。「授業者としての自分を見つめて—『子守唄』の授業を通して—」、『齋藤喜博の個人雑誌 開く』18, 1977年11月など。
- 3) 平成10年度。幼稚園と小学校の全教職員の人数である。
- 4) 本島中部読谷村西海岸にある岬の名前である。伊江島から南南西の方角にある。距離は32kmほどであり、肉眼でみるのは難しい。
- 5) 本島北部、海洋博覧会の行なわれた本部町西海岸にある岬である。伊江島から東側の方向にあり、距離は10kmと近い。
- 6) 知念レイ子「校内研修とその人間模様—校長のブックトークに学んで—」63頁、『伊江村立西小学校 平成10年度実践研究紀要』平成11年3月（オフセット印刷）
- 7) 筆者による聞き取り。2000年2月4日、西江重勝氏談。
- 8) 知念レイ子, 同前, 64頁
- 9) 狩野「学習過程論」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第9巻, 49-58頁, 1999年11月
- 10) 狩野「島小における教職員の力量形成」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第10巻, 47-62頁, 2000年11月
- 11) 筆者の聞き取りによる。西江重勝氏談, 同前。
- 12) 狩野「島小における『解放』と教育」、『鹿児島大学教育学部紀要（教育科学編）』第51巻, 217-236頁, 2000年3月
- 13) 大城光枝「詩『ひらいたひらいた』の音読に取り組んで」68-69頁、『伊江村立西小学校 平成10年度実践研究紀要』平成11年3月（オフセット印刷）
- 14) 同前
- 15) 同前
- 16) 宮城隆「校内研修を終えて」70頁, 同前書
- 17) 西江重勝「平成11年度『学芸会』兼『学力向上実践発表会』の開催に当たって」, 同『一鑑賞資料—』1-2頁, 平成12年2月5日（オフセット印刷）

- 18) 筆者による聞き取り。西江氏談。
- 19) 知念レイ子「校内研修とその人間模様—校長のブックトークに学んで—」63頁、『伊江村立西小学校 平成10年度実践研究紀要』平成11年3月(オフセット印刷)
- 20) 長嶺妙子「特別研修を受けて…変えられるか自分を…」5頁, 同前書
- 21) 名嘉敬子「オペレッタ『みにくい あひるのこ』に取り組んで」6-7頁, 同前書
- 22) 名嘉, 同前, 8頁
- 23) 名嘉, 同前, 8-9頁
- 24) 大城一子「全校合唱に取り組んで—ひとつのことに向かってみんなが繋がったときの, 力の大きさと暖かさを感じて—」31頁, 同前書
- 25) 大城, 同前, 33頁
- 26) 古波津裕子「特別研修会の中の子どもたち—養護教諭の立場から—」62頁, 同前書
- 27) この時の報告は、『事実と創造』第229号, 2000年6月, 19-24頁にある(狩野「心を開く表現活動に取り組んだ伊江村立西小学校の学芸会に学ぶ」)。本稿の3には, この報告を大幅に書き直したものを使用した。
- 28) 斎藤喜博作詞, 近藤幹雄作曲
- 29) 野村新作詞, 梶山正人作曲
- 30) 西江重勝「『行事をつくる仕事』に学んで」, 横須賀薫, 梶山正人, 松平信久編『心をひらく表現活動 1 遊びとともに』149頁, 1998年, 教育出版
- 31) 筆者による聞き取りによる。2000年2月4日
- 32) 伊江村立西幼稚園・西小学校「平成11年度『学芸会』兼『学力向上実践発表会』—鑑賞資料—」(謄写版刷り), 13頁, 平成12年2月5日
- 33) 武田英子作, 梶山正人作曲
- 34) 小松田克彦作詞, 梶山正人作曲
- 35) 斎藤喜博作詞, 丸山亜季作曲
- 36) 筆者による聞き取り。西江氏談。『琉球新報』平成12年1月5日付け朝刊。
- 37) 名嘉, 同前, 8頁, 『伊江村立西小学校 平成10年度実践研究紀要』平成11年3月(オフセット印刷)
- 38) 大城「全校合唱に取り組んで—ひとつのことに向かってみんなが繋がったときの, 力の大きさと暖かさを感じて—」35頁, 同前書
- 39) 大城, 前出
- 40) 上間真利子「表現活動から学んだこと」65頁, 同前書
- 41) 知念カナヘ「湯茶室からの感想」66頁, 同前書

【附記】

2000年2月4日, 学芸会の前夜に伊江村の教育関係者や西小の保護者の皆さんと懇談する機会が持てた。3年間にわたる西小の教育実践を支えてこられた島の方々の気持ちが伝わってくるような会であった。

当日, そろそろ日付が変わるという時間になって, 学芸会の会場設営のことが話題となった。保護者用にしつらえた座席位置に敷き詰めた“ござ”が痛んでいるというのである。さっそく, 会に参加していた保護者の皆さんが連絡を取り合い, 村の農協にある新しいござを運び, 交換することになった。筆者も同行し若干のお手伝いをしたのであるが, 全て運び終えたのは午前2時をまわった頃であった。学校を支えるということの意味が実感できたひとときであり, 子どもの可能性を拓く教育実践の真価というものをもっともよく顕われた出来事であった。

同校への現地調査にあたって, 前伊江村立西小学校長西江重勝氏ほか同校の教職員の皆さん, 千葉経済短期大学部教授梶山正人氏, 西小PTAの役員の皆さん, 西小の子どもたちには物心ともにお力添えをいただいた。記して感謝申しあげる。